第１節　見通しをもって行動する

幼児が生活に入ったとき、戸惑いの中で試行錯誤を繰り返しながら、生活に必要な行動を一つ一つ獲得していく。友達や教師と関わりをもつ中で、それぞれの家庭で獲得された生活習慣を社会的に広がりのあるものとして再構成し、自立心や協同性、また規範意識を持てるような配慮が教師にとって大切なこととなる。

その上で、幼児の活動が、幼児の必要感に基づき、自発的に展開されるものであれば、幼児の意識の中でつながりが芽生え、幼稚園生活の大まかな予測をもてるようになり、次第に生活に必要な行動について見通しをもち、自立的に行動できるようになっていく。

幼児自身の意識によって少しずつ生活習慣を身につけられるようになり、次第に見通しをもって行動することができるよう、幼稚園生活全体を楽しく、脈絡のあるものとすることが大切である。

ここでは、３年保育３歳児の事例１「一緒に歌おうね」から次の活動へ期待を持って楽しみながら参加する姿、事例２「サメがやりたいんだ」から、幼児が、課題をどのように解決したらよいのかを考え、自立した行動をしようとする姿を取り上げる。

（関連資料:「埼玉県幼稚園教育課程指導・評価資料」（平成３１年３月埼玉県教育委員会）Ｐ４８～Ｐ５１）

１　幼児の実態　（３、４、５歳児混合クラス　３５名）

３歳児は、入園当初は、保育室や園庭にあるもの全てに興味を示し、自分のやりたいことを優先して行っている。また、朝の身支度では片付けをしないで、脱いだ服はそのまま散らかした状態で園庭に行き、遊んでいる様子が見られた。

一方、年長児が率先して着替えや片付けを手伝う姿を見て、制服から体操着に着替えることが分かり、自主的に行おうとする幼児もいる。

２　指導のねらい

・幼稚園生活に必要な習慣や行動を繰り返す中で、みんなと一緒に行動する心地よさや満足感を味わう。（事例１　３歳児）
・集団における行動を楽しむためには、一人一人がどのように活動すればよいのかを友達と考え、自分の力でやり遂げる充実感を味わう。（事例２　３歳児）

３　指導を行う際に主に考慮する「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

・友達と関わる中で，互いの思いや考えなどを共有し，共通の目的の実現に向けて，考えたり，工夫したり，協力したりし，充実感をもってやり遂げるようになる。
［幼稚園教育要領　第１章　第２の３（３）「協同性」］
・友達と様々な体験を重ねる中で，してよいことや悪いことが分かり，自分の行動を振り返ったり，友達の気持ちに共感したりし，相手の立場に立って行動するようになる。また，きまりを守る必要性が分かり，自分の気持ちを調整し，友達と折り合

いを付けながら，きまりをつくったり，守ったりするようになる。

［幼稚園教育要領　第１章　第２の３（４）「道徳性・規範意識の芽生え」］

・身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で，しなければならないことを自覚し，自分の力で行うために考えたり，工夫したりしながら，諦めずにやり遂げることで達成感を味わい，自信をもって行動するようになる。

［幼稚園教育要領　第１章　第２の３（２）「自立心」］

４　内容

・教師や友達と一緒に歌うことの楽しさを味わう。（事例１）
・運動会の練習で困っていることを友達と伝え合い、一緒に考えながらクラス全体の活動に取り組む。（事例２）

５　環境構成のポイント

・「明日は一緒に歌おうね。」と教師が声をかけ、クラスの友達と互いに約束をすることで、期待と見通しが持てるようにする。（事例１）
・歌うことを好む幼児達であるので、楽しく歌ったことを十分に称賛する。（事例１）
・発表の際の立ち位置にシールを貼り、集合の際に戸惑わないよう配慮する。（事例１）
・幼児が自ら考えながら練習ができるように、トラックのどの場所を走るのかを黒板の図などで説明し、確認をしてから練習を行う。（事例２）
・クラスの子供が心を一つにし、先を見通して、期待感をもって練習に参加できるよう、カレンダーを使うなどして気持ちを高めるよう工夫する。（事例２）

６　活動の展開と評価

⑴　事例１「一緒に歌おうね」（４月）

教師「お歌の練習をします。並んでください。」
幼児は立ち位置に貼られたシールに沿って並ぶ。
Ａ児（３歳児）「わたしどこに並ぶのかわからないよ。」
Ｂ児（５歳児）「Ａちゃんの前は私だよ。」
Ｃ児（５歳児）「Ａちゃんの後ろはぼくだよ。」
Ｄ児（５歳児）「年少さんの並び順は前の列だからね。」
Ａ児は自分の位置に立つ。子供同士の自己紹介が始まる。
Ａ児も少し安心した表情になり、楽しみながら歌うことができた様子である。
教師「Ａちゃん、お友達と一緒に歌えたね。楽しかったね。」
Ａ児「また明日もお歌の練習ある？」
教師「お弁当を食べた後に練習しようね。」
Ａ児「うん、がんばるよ。」
　次の日、お弁当を準備していると、Ａ児は歌を歌うときに隣に並ぶ友達のところへ行き、お弁当を一緒に食べていた。
Ａ児は「みんな、この後はお歌を歌うからね。」と、クラスの友達に伝え、自分の位置

に一番に並ぶことができていた。

○事例１に対する評価

（幼児理解、ねらいや内容の妥当性）

歌をうたったり、表現したりすることを好む幼児が多く、共に表現することの楽しさを味わえるような声掛けを多くし、意欲を高めた。それによって、「また、明日も歌いたい」という気持ちで、見通しをもった言動が見られたと考えられる。

（環境構成、教師の援助）

事前に「ご飯の後はお歌の練習だよ。」と伝えたり、生活の流れに沿った活動になるように毎日同じような時間に練習を行ったりするなど、見通しがもてるように配慮した。

また、並ぶ位置に目印のシールを貼り、幼児が入場の際に自分の場所がわかりやすいようにした結果、友達同士で声を掛け合い、助け合う姿も見られた。この関わりが、「友達と歌うと楽しい」という意識を高めていた。

⑵　事例２　「サメがやりたいんだ」（９月）

２学期になり、運動会に向けての活動を始める。年長児を中心に全園児で行う野外劇「スイミー」の話合いをし、海の生き物を体で表現したり、側転や馬跳びを練習したりしている。

Ｅ児はサメ役を希望し「ぼくは力持ちだから大丈夫だよ。」と前向きな気持ちでいた。

しかし、野外劇の練習が始まると、友達に気を取られたり、砂あそびをして自分の出番に出遅れてしまったりする姿が、Ｅ児をはじめ、他の幼児にも見られた。

教師「サメさん、出番に遅れちゃうね。」
Ｅ児「ぼく、いつも遅れちゃうんだ。」
教師「どうしたらいいかなあ。」
Ｆ児「ぼくは、数を数えて遅れないようにするね。」
教師「いいアイデアだね。」
Ｇ児「魚の役の次だから、よく見ていたら大丈夫だよ。」
Ｅ児「うん、やってみるよ。」

次の日、魚の役の出番になると、Ｅ児は顔を上げて、サメ役の準備をしている姿が見られた。その姿に気づいたＦ児とＧ児は、目線を合わせ頷いていた。

翌日からは自分の出番の前になると、サメ役の準備をすることができた。

また、本番でもＥ児は「１・２・３・４・５…。」と数を数えてから振り返り、全力で走り切ることができた。

○事例２に対する評価

（幼児理解、ねらいや内容の妥当性）

Ａ児は練習をしたい気持ちはあったが、出番に遅れてしまうことが続いた。教師の声掛けにより、自分から不安なことを言葉で伝え、友達からの一言をきっかけに練習

へ参加する意識が芽生え始めた。Ｅ児は自分の出番の前後の役を覚え、友達の協力を得て、遅れることなく自分の役割の準備することができた。

友達と声を掛け合ったり、力を合わせたりしながら、自分たちでどうしたらよいかを考え必要感を感じながら、見通しをもって行動し、不安を乗り越えることができた。

（環境構成、教師の援助）

幼児が困っていることを自分の言葉で伝える場を、教師が設けることにより、友達と一緒に考えたり、練習方法を工夫したりすることにつながった。

７　評価を踏まえた指導計画の改善

⑴　短期の指導計画の改善

・運動会の野外劇「スイミー」の練習を通して、困っている友達を助けようとしたり、友達の意見に耳を傾け困難を乗り越えたりする幼児の姿が見られた。活動する姿を具体的に認める声掛けをすることで、さらに意欲を高め、見通しのもった活動を、自信をもって行えるようにしたい。（事例２）

・練習中、教師が、友達の行動にも注目できるような声掛けを行う必要があった。事前や練習の過程において、いろいろな役がそれぞれの役割を果たすことや、協力してやり遂げる重要性等、幼児の気づきを促す場の設定の工夫も必要である。（事例２）

⑵　長期の指導計画の改善

・入園当初の、自分のやりたいことを思う存分楽しむ段階から、少しずつ集団を意識し、友達と共に行動をしようとする姿が見られるようになった時期である。「一緒に楽しく活動する」ことをめあてとする活動を、園生活の他の場面にも位置づけ、重点化を図りたい。